

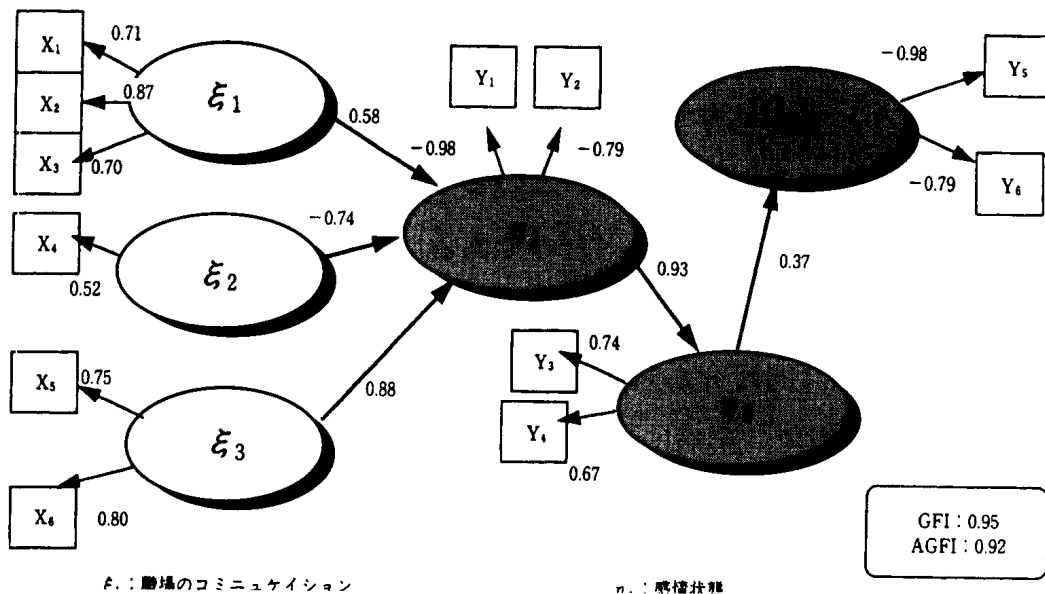
知覚されたソーシャル・サポートの分析的研究

小林 茂樹・小村 緩岳・高木 敬雄

(受付 1999年10月12日)

序 論

近年、人間を目的志向性のある生物 (goal-oriented creature) としてとらえ、感覚・知覚および高次の目的思考レベルの行動研究が必要とされている (斎藤, 1998)。その具体例として、渡辺・関・斎藤 (1997) は、職場環境における人間関係と、感情状態、自己効力感、心身の健康度といった個人の状態との関連をモデル化している (Fig. 1)。それは、いわゆる知覚さ



ξ_1 : 職場のコミュニケーション
 X_1 =上司, X_2 =同僚, X_3 =人間関係
 ξ_2 : 作業の計画立案
 X_4 =作業の計画立案
 ξ_3 : 勤務形態の裁量性
 X_5 =勤務時間裁量性, X_6 =シフトの裁量性

η_1 : 感情状態
 Y_1 =抑鬱落込, Y_2 =混乱
 η_2 : 自己効力感
 Y_3 =存在価値, Y_4 =貢献度
 η_3 : 自覚的健康度
 Y_5 =抑鬱性, Y_6 =神経症傾向

Fig. 1 ラッピング・ペーパー製造工場における作業者の感情状態、自己効力感を媒介とする職場環境要因と心身の健康度の因果影響関係 (渡辺・関・斎藤, 1997)

れたソーシャル・サポート研究と本質的に類似しており、今後のソーシャル・サポート研究に新たな問題提起をしたものとも考えられる。そこで本論文では、個人を取り巻く環境と、その認知方略が、個人の自己組織的・能動的行動といかに関わるのか、知覚されたソーシャル・サポートの観点から検討していく。

(I) ソーシャル・サポート

ソーシャル・サポートは、もともと精神障害者の存在・発生についての空間的分布などに関する生態学的研究と、精神衛生学における「非専門家による援助資源」の重要性についての指摘の双方のなかで、案出され注目を集めるようになった概念である。個人の内的要因に加えて、地域社会の精神障害者に対する責任性を強調し、専門家に限定せず地域社会のもつ資源を用いて、精神障害者の治療のみならず、予防、ケアを実践しようとするものである。すなわち、個人をそれだけでとらえず、全体のなかの個としてとらえようとする見方であり、全体への働きかけを通して個人による影響を与えようとするものである。このようなアプローチは、精神衛生の分野に全く新しい方向づけを与えたのである。

アメリカの疫学者でもあり、医者でもある Cassel (1974) は、疾病の発生率、回復率の統計的研究から、ストレスの多い状況から疾病にかかってしまう人がいる一方で、疾病にかからない人も存在することに着眼した。そして、「社会的環境 (=社会的紐帯) の有り様が疾病に対する人々の脆弱性を規定する」という仮説を立て、社会的環境の改良・強化をもって、ストレスからの個人の保護に向けての実践的介入の手段を考えた。

同様に、地域精神医学者である Caplan (1974) も、ある地域の特性がその地域に住む人々の精神衛生にどのような影響を及ぼすかを検討し、個人の発達の・状況的危機に対して重要な影響を及ぼす社会的環境として、ソーシャル・サポート・システムという概念を提出した。これは、「個人に対してフィードバックをもたらし、また個人が他者に対して抱く期待を充足し

てくれる、継続的な社会的紐帯（集合体）のうちに存在する」と概念化された。危機状況での反応はストレスの性質やその強弱あるいは自我の強さのみに影響されるのではなく、もっと重要なのは、その人が危機と取り組んでいるその社会の相互につながりのある密接な組織から得られる、情緒的なサポートや仕事中心になされる援助の質であるというのである。サポートイヴ（援助的）な他者達は、危機に直面した人の、①情緒的な問題を処理するための心理的資源を動員できるよう援助する、②課題を共有する、③危機に対処するための物質的・手段的資源および認知的指針を提供する、という3つの主要な機能を果たすものとして定義された。しかし、ここでは、ソーシャル・サポート及びサポート・システムが、健康・モラル・状況の統御感などの諸結果に対して持つ予測的妥当性ゆえに重視され、概念そのものの構成的妥当性は深く追求されることはなかったため、このままの形で受けつがれはしなかったが、サポートの内容を情緒的なものと実体的なものに分けてとらえた点が、その後の研究に引き継がれた。

CasselとCaplanに対して、Cobb（1976）は、ソーシャル・サポートを概念的に明確に定義し、それとストレスとの関連について、理論的な整理を図ろうとした。彼は、ソーシャル・サポートを「個人に、当該個人が世話され、愛され、尊重され、相互的な責務を持ったネットワークメンバーである、と信じさせるような情報である」と定義している。この定義の特徴は、情報の概念を前面に押し出し、実体的な援助よりも、より表出的な側面でのサポートの有効性が強調され、「個人による認知または体験」という主観的な側面を重要視しているところにあるので、極めて認知的なサポートであるといえる。この定義は、調査研究への適用が比較的容易であったため、その後の多くの検証的研究の基礎となった。

このような経過を経て登場したソーシャル・サポートに関する研究は、その後の20年間で心理学の諸領域の中で、多くの関連研究を生んだ領域の一つとなった。

Gottlieb（1981）は、ソーシャル・サポートの構成概念の中に含まれる3

つの意味について論じている。彼によれば、ソーシャル・サポートは①人々の属する社会的ネットワーク、②ネットワーク中での援助的な行動、③知覚されたサポートの入手可能性、という異なった次元での操作化があり得るというのである。この点をより鮮明に主張するのが、Barrera (1986) である。彼はソーシャル・サポート研究における操作化のありようを、①社会的包絡、②知覚されたサポート、③実行されたサポート、の3つに区分している。

日本においても、浦・南・稲葉 (1989) は、ソーシャル・サポート研究を、3つに分類している。①ソーシャル・サポート概念と他の諸概念の対応、②支持的な相互作用の分析、③生態学的要因の重視、である。

また、久田 (1987) は、主に欧米のソーシャル・サポートに関する論文から、測定方法による4つの分類を行っている。それは、①社会統合的アプローチ、②知覚的アプローチ、③社会的ネットワーク分析、④行動記述的アプローチ、の4つである。社会統合的アプローチとは、その人がその人の所属する社会に組み込まれている程度を客観的指標として、ソーシャル・サポートをとらえようとするものである。知覚的アプローチは、個人の知覚的評価による社会的結びつきの質 (信頼性、親密性、満足度、入手可能性など) を問題にする。社会的ネットワーク分析とは、個人が網の目状に張りめぐらしている人間関係の構造を査定し、対処行動や適応に必要な社会資源を放出しやすい構造的特徴とは何かを明らかにしようとするものである。行動記述的アプローチとは、重要な他者が実際に行った援助的行動を記述することによってサポートをとらえようとするものである。

ソーシャル・サポートをこのように区分することで、拡散的な経験的研究ならびにその知見を整理・統合し得る可能性がひらけ、また変数間の関連をより正確に理論化することに寄与したのである。

ソーシャル・サポートを「知覚された経験」すなわち「知覚されたサポート」として把握するアプローチは、ストレスに対する緩衝仮説と直接仮説との関連から、これまでに最も多くの経験的研究が、蓄積されてきた

(Schaefer, Coyne & Lazarus, 1981; Cohen & Wills, 1985; Norbeck, 1985)。しかし、これらの研究成果は全て欧米における実証的な研究に基づくものであり、わが国においても、これらをそのまま適応するには問題点が多い。まず、日本においても知覚されたサポートを指標とする研究が数多く報告されているが、欧米とは異なる現象が報告されている。それは、知覚されたサポートを用いた研究の重要な仮説であるストレス緩衝仮説に対して、弱い支持しか得られていないということである（南・稲葉・浦，1987）。

最近の研究においても、このような現象は生じている。例えば、大学生を対象とした調査では、女子の場合、ストレスがあまり高くない状況では家族サポートがその対処に役立つが、あまり高くなるとサポートが役に立たないという現象が報告されている（嶋，1992）。

また、知覚されたサポートは認知に基づくものであるにも関わらず、そのことを考慮した研究がまだ少ないので、構成概念の妥当性は確立していない。これは、「知覚されたサポート」の各尺度が、再テスト法などの結果において時間的な安定性が高いことから、回答者の特性や状況に大きく依存するものであり、可変的な社会過程よりも安定的な心理学的変数を実際には測定している可能性が大きいのではないかという指摘もある（Gottlieb, 1985）。

このような観点をふまえて、主体側の要因とソーシャル・サポートとの関連を究明しようとする研究もいくつか見られる。Swann & Predmore (1985) は、ソーシャル・サポートとしての他者からの評価と自己概念の関係から研究を行っている。彼らは、親密な他者からの肯定的なフィードバックが、そうでない者からのフィードバックよりも自己評価を高めることを検証し、このことがストレス緩和効果につながると主張している。

豊松・小村・高木（1998）は、YG 性格テストの性格類型の違いによって、サポートの知覚に差異がみられ、精神的健康に影響することを見いだしている。

堀野・森（1991）は、ソーシャル・サポートの抑うつに対する効果の研

究を基盤として、効果の有効性を規定する要因の検討の重要性を指摘し、その要因として、サポートの受け手の達成動機という調整変数を取り上げている。その結果、大学生では、抑うつに対するソーシャル・サポートの緩和過程に、自己充實的達成動機という調整変数が存在していることを検証した。すなわち、達成動機というサポートの受け手の内的特性の能動的側面に、ソーシャル・サポートが影響し、抑うつに対し有効に働いたことを示唆するものである。このように考えたとき、個々の持つ充足感、満足感、達成感といった実存性に、ソーシャル・サポートが影響を及ぼし、個人の精神的健康に作用するものであると考える。

また、この知覚されたサポートを指標として、もう一つのアプローチである社会的ネットワーク分析を行うことも可能である。ここでいうネットワークとは、個人を取り巻くサポート源の総称であり、社会的ネットワーク分析とは、個人の持つ対人関係を統合的にとらえようとするものである。

以上のことから、ソーシャル・サポートの効果は、サポート源とサポートの種類、またはそれを知覚する主体の要因によって変化する力動性を持っていると考えられる。したがって、ソーシャル・サポートの構造をさらに明らかにするためには、サポート源となる「誰」による「如何なる種類」のサポートが有効か、そしてそれを「サポートの意味を認識する主体の特性」との関係性を考慮した上で考えることが今後の研究の課題である。

(Ⅱ) 実存的意識

Frankl は、人間の動機づけの基本となるものは「意味への意志」であると考えた。すなわち、「人生の意味」や「自己存在の意味」を見つけたり、創造していく欲求や意志こそが、人間の基本的な心性と考える。これらは、人生の生きがい感や充実感を見出し作り出そうとする態度、行動に結びつくものである。

Frankl (1969) は、人間の精神的次元を重視し、神経症を従来の心因性及び身体因性神経症とは別に、精神的問題・道徳的葛藤・良心との葛藤・意

味へのフラストレーション・実存的空虚などから生じる精神因性神経症があるとしている。自分の人生に独自性の感覚を与える意味と目的を見出せないとき、実存的空虚を経験するとしている。この空白状態は、主として退屈、倦怠としてあらわれ、それが持続すると「実存的欲求不満」となる。これは意味、目的が見出せないことに対する情緒的反応である。実存的空虚は、それ自体は神経症でも異常でもなく、人間が持つ一つの特性であり、Frankl はそれを現代という機械化時代の産物であると述べている (Frankl, 1969)。

高度な科学技術の進歩と経済的繁栄の裏面で様々な社会病理現象が進行しつつある。各種精神障害の受病率も増加の一途をたどり、また人生に対し、生きる意味や価値を見出せず無気力な生活を送る人々も多い。こうした状況を踏まえ、近年、青年や成人を対象に実存的問題意識を問う研究も多く見られる。こうした中で、アメリカの Crumbaugh と Maholick (1964, 1969) は、Frankl のロゴセラピーの考え方に基き、Purpose in Life Test (以下、PIL と略す) を作成した。PIL は、Frankl のいう精神因性神経症を従来の神経症と区別するために開発され、実存的概念の数量化を進め、実存的空虚、実存的欲求不満を数量的に測定することを目的に作成されたものである。

日本における PIL 研究としては、その日本語訳を行い1966年以降研究を重ねている佐藤 (1975) の研究をあげることができる。佐藤は、特に「個人がどの社会に、どの年齢を生きているかによって影響されるのではないか」との問題意識の下に研究を行っている。さらに佐藤・山口・田中・斉藤・岡堂・千葉 (1990) の研究では、PIL の態度スケールの質問項目に関する全面的検討を行っている。

目 的

本研究では、個々の内的特性である実存的意識を媒介とする知覚されたソーシャル・サポートと精神的健康の因果影響関係を検討することを目的

とする。

そして、社会的ネットワーク分析より得られる個人を取り巻く対人関係の構造から、知覚されたサポートの種類とそのサポートを認識する実存的意識との関係を考慮した上で、サポートの効果を明らかにするものである。

方 法

1998年7月に大学生を対象に評定用紙を配布して調査を依頼した。記入に著しい不備のあったデータを除去した結果、最終的な分析対象は250名(男性73名, 女性177名)で、平均年齢は、男性20.63歳, 女性20.19歳となった。しかし、サポート源の有無により、データ数の変動がみられた。

(I) 知覚されたサポートによるネットワーク調査

嶋(1991)の開発した測定方法を基にし、豊松・小村・高木(1998)が作成したものを用いた(Fig. 2)。これは12のソーシャル・サポートの質問項目から構成され、被調査者に5件法で評定させるものである。特徴的なこととして、以下の2点が挙げられる。

① ソーシャル・コンパニオンシップの採用

直接的な援助だけでなく、結果として援助的な効果をもたらすソーシャル・コンパニオンシップ(娯楽を追求する行為を共有すること)の方が、従来扱われていた狭義のサポートよりも広い効果を示す(Rook, 1987)ということに基づき、これを採用している。

② サポート源を広範囲にわたって採用

これまでの多くの知覚されたサポートによる研究は、サポート源を両親と友人のみに限定しているが、嶋(1991)や豊松・小村・高木(1998)の調査法は個人を取り巻くあらゆる人々を対象としている。これは、個人のサポートネットワークをより具体的に明らかにする試みである。

小林・小村・高木：知覚されたソーシャル・サポートの分析的研究

〈あなたが周囲の人々との関係をどのようにとらえているのかをおたずねします〉
 まず以下に述べる10人の人物について、それぞれ1人ずつ最もよく当てはまる人物を思い浮かべてください。
 そして、その人の名前のイニシャル（またはニックネームでも可）を（ ）に記入してください。
 当てはまる人物が複数いる場合でも、あなたにとって最もよく当てはまると思う人物を1人だけ記入してください。
 該当する人物がない場合は（ ）に×印を記入してください。
 また、項目Jについては、イニシャルの右側にその人が具体的にあなたとどのような関係にあるのかを記入してください（例えば、祖父母、親戚、サークルやアルバイトの先輩・後輩など…）

記入例：あなたにとってJ項目に当てはまる人が「小林茂樹」さんで、アルバイト先の先輩であるならば、以下のように記入してください。

- ↓
- J：その他自分にとって重要な他者（S・K／バイト先の先輩）
 *その他のA～Iについては、イニシャル(ニックネーム)のみを記入してください。
- A：父親 ()
 B：母親 ()
 C：年上のきょうだい ()
 D：年下のきょうだい ()
 E：最も親しい同性の友人または親友 ()
 F：E以外の同性の友人 ()
 G：最も親しい異性の友人または恋人 ()
 H：G以外の異性の友人 ()
 I：自分にとって最も重要な先生 ()
 J：その他自分にとって重要な他者 ()

〈先ほどあなたが挙げたA～Jの各人物とあなたの関係についておたずねします〉
 次に示す12項目の内容がどのくらい当てはまるかを、5段階で評価してください。
 該当する人物がおらず、×印をつけた人物については評価の必要はないので、斜線を引いてください。

全くない あまりない 少しある かなりある 非常によくある
 1 2 3 4 5

*上記の5段階尺度にしたがって、数字を記入してください。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1. おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす										
2. 一緒に遊びに出かけたりする										
3. 共通の趣味や関心を持っている										
4. プライベートなことについて話し合う										
5. お互いの気持や感情をわかりあえる										
6. 個人的な悩み事について話し合える										
7. いろいろな情報のやりとりをする										
8. 困ったときに助言してもらったり、相手が困っているときには助言してあげたりする										
9. わからないことを聞いたり、教えたりしあう										
10. 忙しいときには手伝ってあげたりする										
11. 必要なときに、お金や物の貸し借りをする										
12. プレゼントをあげたり、もらったりしあう										

Fig. 2 ソーシャル・サポート・ネットワーク調査用紙

(Ⅱ) 精神健康度の測定

一般精神健康調査票 GHQ (General Health Questionnaire) の日本語版を用いた。これは、神経症傾向などの精神的健康状態について測定するものである。本研究では、身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害、うつ状態の4つの下位尺度から成る28項目の短縮版 (Goldberg & Hiller, 1979) を用いた。この28項目版は、東大式健康調査票 THI (鈴木・柳井・青木, 1976) との関係から、60項目版と同様の有用性が確認されている (Iwata & Saito, 1987)。通常の GHQ 方式は、4件法の回答に0, 0, 1, 1点を与えるものであるが、得点の正規分布を配慮して、4件法の回答に0～3点を与える Likert 法で評価し、その合計点を指標として用いた。

(Ⅲ) 実存的意識の測定

PIL (Purpose in Life Test) テストの日本版を用いた。このテストは Franci のロゴセラピーの考え方に基づいて、アメリカの Crumbaugh と Maholick (1964, 1969) によって考案された心理検査であり、Part-A, B, C の3つの部分からなる。Part-A は質問形式 (20項目)、B は文章完成式 (13項目)、C は自由記述 (1項目) である。日本版は、それらを翻訳し、標準化したものである (Sato & Tanaka, 1974; 佐藤, 1975)。

本研究では、Part-A を測定の尺度として用いた。Part-B, C はそれぞれ文章完成式、自由記述であることから、判定が困難と考え本研究では用いなかった。Part-A は7段階評定法による20項目の質問で構成され、得点は各項目の評定段階を単純合計したもので、合計20～140点の範囲となる。高得点なほど実存的意識が強いと考えられる。この Part-A は PIL テストの中心部分であり、人生の充実感、実存的意識の強さを数量的に量ろうとする部分である (山口・佐藤, 1993)。

結 果

(I) サポート得点の検討

まず、サポート得点をサポート源ごとに集計し、男性・女性・全体のそれぞれの平均値を算出した (Fig.3)。知覚されたサポート得点は、各サポート源から得られるサポートの量を意味する。サポート源別のサポート量は、同性親友において最も高く、先生において最も小さい。また男性と比べて女性の方のサポート量が大きい。そこで、サポートの量の差を検討するために、性別を1要因として被験者間変数による分散分析をサポート源別に行った。その結果、「父親」($F=4.11$, $df=1/242$, $p<.05$), 「母親」($F=49.56$, $df=1/247$, $p<.0001$), 「年上きょうだい」($F=12.04$, $df=1/130$, $p<.001$), 「年下きょうだい」($F=7.54$, $df=1/141$, $p<.01$), 「同性親友」($F=25.92$, $df=1/246$, $p<.0001$), 「同性友達」($F=22.21$, $df=1/247$, $p<.0001$), 「その他」($F=4.45$, $df=1/177$, $p<.05$) において、性別の主効果に有意差が見られた (Table 1)。

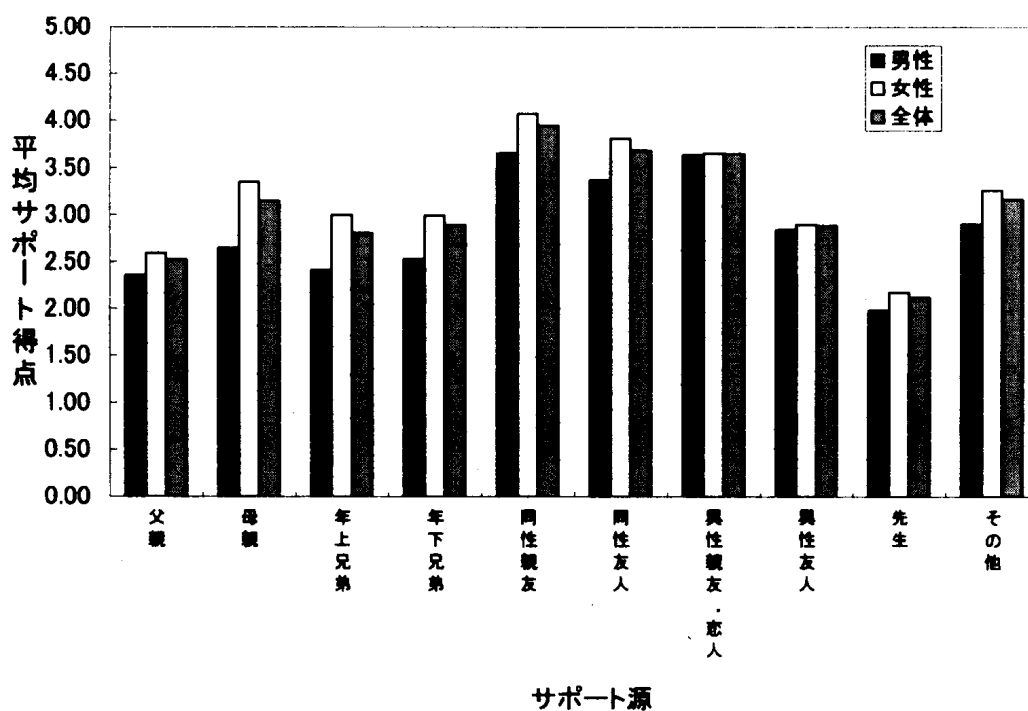


Fig. 3 性別によるサポート得点の平均

Table 1 性別による各サポート源別サポート得点の平均・SD

サポート源	男性		女性		F 値	DF
	平均	SD	平均	SD		
父 親	2.36	0.74	2.59	0.83	4.11	1/242*
母 親	2.65	0.72	3.36	0.72	49.56	1/247****
年上きょうだい	2.42	0.93	3.00	0.88	12.04	1/130***
年下きょうだい	2.53	0.61	2.99	0.89	7.54	1/141**
同性親友	3.65	0.62	4.07	0.58	25.92	1/246****
同性友人	3.37	0.69	3.81	0.67	22.21	1/247****
異性親友(恋人)	3.64	0.77	3.65	0.88	0.01	1/198
異性友人	2.84	0.73	2.90	0.78	0.24	1/193
先生	1.98	0.64	2.18	0.77	2.73	1/188
その他	2.90	0.89	3.26	1.07	4.45	1/177*

****p<.0001 ***p<.001 **p<.01 *p<.05

しかし、男性と女性では、被調査者の数にかなりの違いがあり、分析方法上の問題点から単純に比較検討できるものではないと考えて、性差による検討は、以後の分析に含まなかった。

(II) 実存的意識と GHQ との関係

実存的意識が精神健康度とどのような関係をもっているかを検討するために、PIL テスト結果を低・中・高の各得点群に分類し、それぞれを GHQ 得点と比較したところ、低得点群ほど、GHQ 得点は高く、逆に高得点群ほど、GHQ 得点は低いという結果が得られた (Fig. 4)。そこで、PIL 群によって分類された GHQ の得点群を 1 要因とした分散分析において、主効果に有意差が認められた ($F=31.31$, $df=2/247$, $p<.0001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、低得点群—中得点群間、低得点群—高得点群間、中得点群—高得点群間のいずれの場合においても有意であった ($p<.05$)。

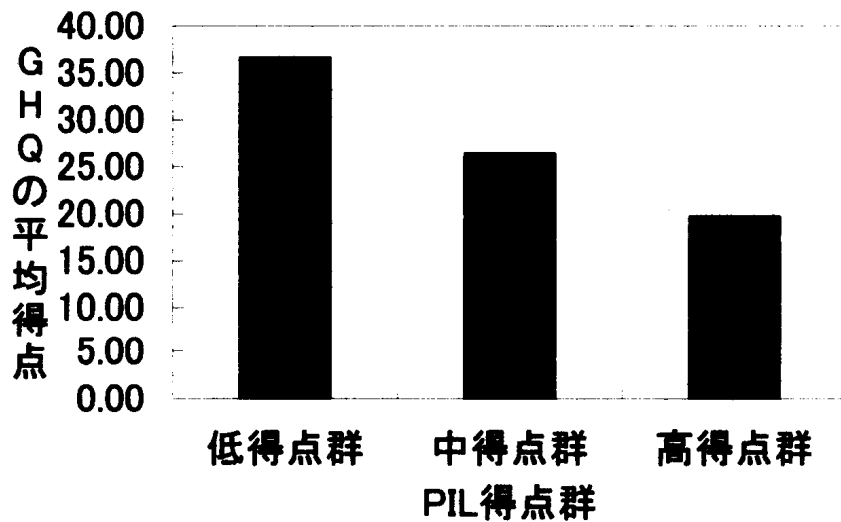


Fig. 4 PIL得点群別のGHQ得点の平均

したがって、PIL得点とGHQ得点の増減には何らかの関係が考えられる。そこで、まず両者の関係を検討するために、相関分析を行った。PILテスト得点とGHQ得点の関係を視覚的に表現するために、散布図を作成した (Fig. 5)。次に、相関係数を算出したところ、PIL得点とGHQ得点の間に比較的強い負の相関が示された ($r = -.49$, $p < .001$)。また、GHQの得点を下位4尺度に分類して、同様にPIL全得点との相関係数を算出したところ、身体的症状 ($r = -.26$, $p < .001$)、うつ状態 ($r = -.43$, $p < .001$)

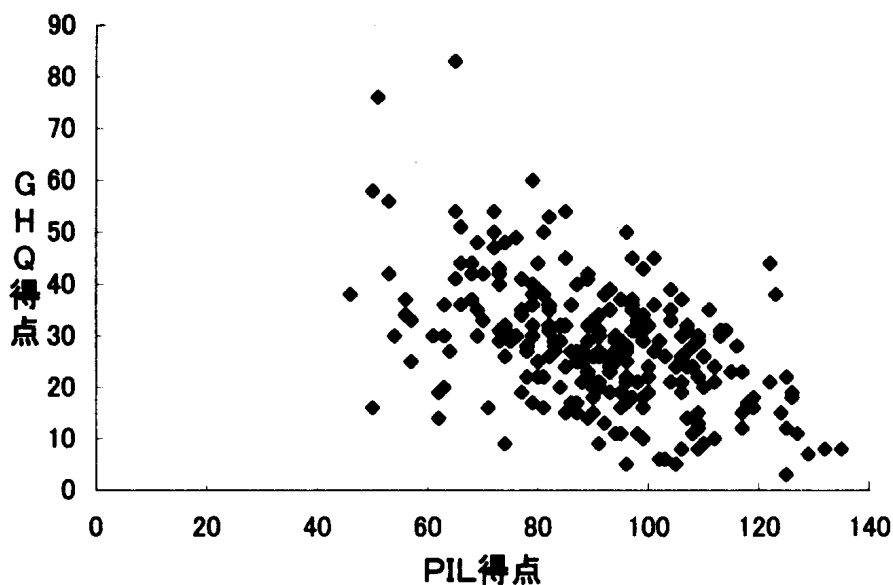


Fig. 5 PIL得点とGHQ得点の散布図

社会的活動障害 ($r = -.50, p < .001$), 不安と不眠 ($r = -.38, p < .001$), のいずれの尺度においても負の相関が示された。中でも, 社会的活動障害において, 最も大きい負の相関が見られた。

(Ⅲ) 実存的意識とサポート得点との関係

知覚されたサポートが, それを知覚する主体の要因によって変化する力動性を有しているなら, 一つの個人特性である実存性と関係することが予想される。そこで, PILテストによって分類された得点群と, サポート得点の関係をサポート源ごとに検討した。まず, PIL得点群ごとに, サポート得点の平均を算出し, サポート源別にまとめた (Fig. 6)。「その他」のサポート源以外のサポート源すべてにおいて, 低得点群ではサポート得点は低く, 高得点群ではサポート得点は高いという傾向がみられた。

そこで, PILテストの得点群ごとのサポート得点による1要因分散分析を行ったところ, 「母親」($F = 3.57, df = 2/246, p < .05$), 「年上きょうだい」($F = 3.42, df = 2/130, p < .05$), 「異性親友 (恋人)」($F = 5.22, df = 2/197,$

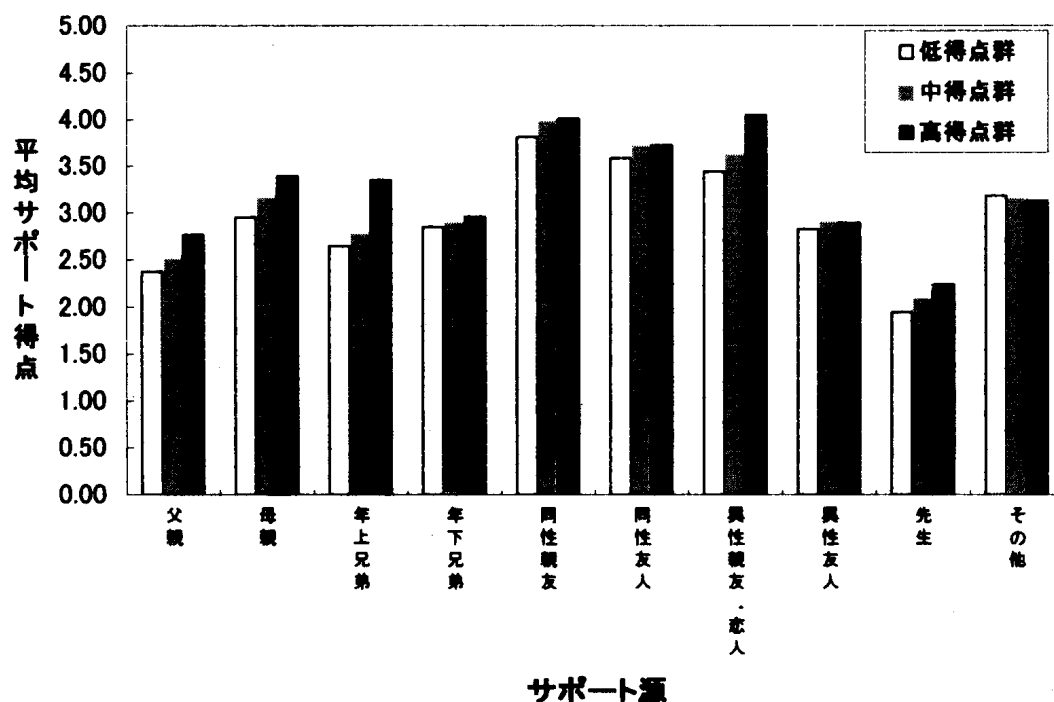


Fig. 6 PIL得点群別によるサポート得点の平均

Table 2 PIL 得点群ごとの各サポート源別サポート得点の平均・SD

サポート源	低得点群		中得点群		高得点群		F 値	DF
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
父 親	2.38	0.79	2.54	0.79	2.77	0.90	2.52	2/241
母 親	2.96	0.79	3.18	0.76	3.39	0.88	3.57	2/246*
年上きょうだい	2.65	0.85	2.78	0.94	3.35	0.97	3.42	2/129*
年下きょうだい	2.85	0.81	2.89	0.89	2.96	0.84	0.09	2/140
同性親友	3.81	0.62	3.99	0.61	4.01	0.68	2.16	2/245
同性友人	3.59	0.71	3.72	0.67	3.72	0.81	0.82	2/246
異性親友(恋人)	3.44	0.79	3.63	0.85	4.05	0.81	5.22	2/197**
異性友人	2.83	0.81	2.90	0.74	2.90	0.81	0.15	2/192
先生	1.94	0.74	2.16	0.72	2.24	0.77	1.81	2/187
その他	3.19	1.08	3.16	1.02	3.13	1.09	0.02	2/176

**p<.01 *p<.05

p<.01) のみにおいて、得点群間に有意差が認められた (Table 2)。得点群間に対して Tukey 法による多重比較を行ったところ、「母親」と「年上きょうだい」では、低得点群—高得点群間、「異性親友(恋人)」では、低得点群—高得点群間、中得点群—高得点群間において有意差が認められた (p<.05)。

したがって、上記3つのサポート源においては、実存性とサポート得点の間に何らかの関係があると考えられる。

(Ⅳ) 知覚されたソーシャル・サポートの内容が PIL 得点に与える影響
 (Ⅲ) では、大まかにサポート源と実存性との関係を検討したが、ここでは、それをさらに詳細に検討するために、「サポートの内容」を考慮した分析を行った。

まず、知覚されたソーシャル・サポートの評定項目からソーシャル・サポートの潜在的構造を見出すために、因子分析を行った。得られたサポー

ト量の各サポート源の差を考慮すれば、因子構造にも違いがみられると予想されるので、ソーシャル・サポートの評定項目(12項目)の因子分析を、各サポート源(10)で行った。これによって10パターンの因子行列が得られた。

因子の抽出は、主因子解法、共通性の初期推定値はSMCである。抽出された初期因子行列に対しバリマックス回転を行った。抽出因子に関しては、本研究の因子構造上のモデルとした嶋(1991)のソーシャル・サポート項目の因子分析では4因子が抽出されている。しかし、本研究のデータにおいては、固有値と累積寄与率、因子内容から3因子が妥当と判断したので、3因子抽出とした。なお、サポート源によっては、3因子抽出においても妥当ではないものがみられたので、それについては2因子抽出とした。同時に、因子得点推定値を算出した。

次に被験者ごとの因子得点を用い、各サポート源別に抽出された因子を説明要因、PIL得点を外的基準変数とする重回帰分析を行い、そのサポート源ごとのサポート因子が、PILテストによって測定された実存的意識にいかに関与しているか検討した。

(1)「父親」サポート

回転後の因子行列をTable 3に示す。第一因子は、父親との精神的・心理的な支援関係という意味で「心理的サポート」、第二因子は、父親との物的な援助関係や問題解決のための情報提供という意味で「実体的サポート」、第三因子は、父親と娯楽活動や趣味を共有するという意味で「友好サポート」と名付けた。

因子得点に基づき、重回帰分析を行ったところ、分散分析において有意差が認められた($F=2.97$, $df=3/240$, $p<.05$)。偏回帰係数のt検定では第二因子(実体的サポート)のみ有意であった($t=4.91$, $df=1$, $p<.05$)。そこで、変数減少法による変数選択の結果、第二因子のみを変数とするモデルが予測されたので、そのモデルを採用した。したがって、変

Table 3 「父親」サポートの因子行列（バリマックス回転）

	第一因子	第二因子	第三因子	共通性
Q 6 個人的な悩みについて話し合える	0.733	0.304	0.297	0.718
Q 4 プライベートなことについて話し合う	0.721	0.240	0.259	0.645
Q 5 お互いの気持ちや感情を分かり合える	0.605	0.274	0.383	0.588
Q 8 困ったときに助言してもらったり相手が困っているときには助言してあげたりする	0.523	0.619	0.242	0.715
Q11 必要なときに、お金や物の貸し借りをする	0.194	0.592	0.176	0.419
Q 9 分からないことを聞いたり、教えたりしあう	0.399	0.578	0.410	0.661
Q12 プレゼントをあげたり、もらったりしあう	0.129	0.528	0.355	0.421
Q10 忙しいときに手伝ってもらったり相手が忙しいときには手伝ってあげたりする	0.307	0.510	0.287	0.437
Q 1 おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす	0.315	0.259	0.664	0.607
Q 2 一緒に遊びに出かけたりする	0.242	0.323	0.553	0.469
Q 7 いろいろな情報をやりとりする	0.344	0.433	0.489	0.545
Q 3 共通の趣味や関心を持っている	0.325	0.233	0.440	0.353
寄与度	2.387	2.243	1.947	6.578
寄与率 (%)	19.89	18.69	16.23	54.82

数減少法による回帰式は、

$$\text{PIL 得点} = 90.76229 (0.0001) + 3.1686 (0.05) \times \text{第二因子}$$

となった。決定係数は、0.0199、重相関係数は、0.1411であった。

(2) 「母親」サポート

回転後の因子行列を Table 4 に示す。第一因子を母親との精神的・心理的な支援関係という意味で「心理的サポート」、第二因子を、母親との物的な援助関係や問題解決のための情報提供という意味で「実体的サポート」、第三因子を、母親と娯楽活動や趣味を共有するという意味で「友好サポート」と名付けた。

Table 4 「母親」サポートの因子行列 (バリマックス回転)

	第一因子	第二因子	第三因子	共通性
Q6 個人的な悩みについて話し合える	0.783	0.291	0.281	0.776
Q4 プライベートなことについて話し合う	0.720	0.187	0.355	0.679
Q5 お互いの気持ちや感情を分かり合える	0.705	0.365	0.171	0.659
Q9 分からないことを聞いたり、教えたりしあう	0.436	0.640	0.285	0.681
Q8 困ったときに助言してもらったり相手が困っているときには助言してあげたりする	0.515	0.538	0.247	0.615
Q10 忙しいときに手伝ってもらったり相手が忙しいときには手伝ってあげたりする	0.374	0.490	0.267	0.451
Q7 いろいろな情報をやりとりする	0.383	0.476	0.419	0.548
Q11 必要なときに、お金や物の貸し借りをする	0.114	0.460	0.250	0.287
Q2 一緒に遊びに出かけたりする	0.305	0.234	0.633	0.549
Q12 プレゼントをあげたり、もらったりしあう	0.135	0.318	0.512	0.381
Q1 おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす	0.476	0.333	0.490	0.578
Q3 共通の趣味や関心を持っている	0.395	0.224	0.424	0.386
寄与度	2.877	1.947	1.767	6.591
寄与率 (%)	23.98	16.22	14.73	54.93

因子得点に基づき、重回帰分析を行ったところ、分散分析において有意差が認められた ($F=4.69$, $df=3/245$, $p<.005$)。偏回帰係数の t 検定では第一因子 (心理的サポート) と第三因子 (友好サポート) において有意差が認められた ($t=6.57$, $df=1$, $p<.05$; $t=4.01$, $df=1$, $p<.05$)。そこで、変数減少法による変数選択の結果、第一因子と第三因子を変数とするモデルが予測された。また、「母親」サポートにおいては、二つの因子を変数とするモデルが検出されたので、二重共線性を考慮して、総当たり法による変数選択も行ったところ、AIC 基準より同様に第一因子と第三因子を変数とするモデルが最適モデルとして選択されたので、そのモデルを採用した。したがって、変数減少法による回帰式は、

$$\text{PIL 得点} = 90.87952 (0.0001) + 3.37579 (0.05) \times \text{第一因子} \\ + 3.04624 (0.05) \times \text{第三因子}$$

となった。決定係数は、0.0517、重相関係数は、0.2274であった。

(3) 「年上きょうだい」サポート

回転後の因子行列を Table 5 に示す。ここでは、2 因子抽出とした。第一因子は、年上きょうだいとの精神的・心理的な支援関係という意味で「心理的サポート」、第二因子を、年上きょうだいとの物的な援助関係という意味で「物理的サポート」と名付けた。

因子得点に基づき、重回帰分析を行ったところ、分散分析において有意差が認められた ($F=4.99$, $df=2/129$, $p<.01$)。偏回帰係数の t 検定

Table 5 「年上きょうだい」サポートの因子行列 (バリマックス回転)

	第一因子	第二因子	共通性
Q6 個人的な悩みについて話し合える	0.847	0.244	0.777
Q4 プライベートなことについて話し合う	0.831	0.320	0.793
Q8 困ったときに助言してもらったり相手が困っているときには助言してあげたりする	0.813	0.381	0.805
Q5 お互いの気持ちや感情を分かり合える	0.752	0.319	0.667
Q9 分からないことを聞いたり、教えたりしあう	0.728	0.351	0.653
Q7 いろいろな情報をやりとりする	0.707	0.364	0.632
Q3 共通の趣味や関心を持っている	0.589	0.256	0.413
Q1 おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす	0.551	0.507	0.561
Q12 プレゼントをあげたり、もらったりしあう	0.280	0.791	0.704
Q11 必要なときに、お金や物の貸し借りをする	0.194	0.732	0.574
Q2 一緒に遊びに出かけたりする	0.437	0.622	0.578
Q10 忙しいときに手伝ってもらったり相手が忙しいときには手伝ってあげたりする	0.466	0.597	0.574
寄与度	4.837	2.893	7.729
寄与率 (%)	40.31	24.11	64.41

では第一因子 (心理的サポート) においてのみ有意であった ($t=9.83$, $df=1$, $p<.005$)。そこで、変数減少法による変数選択の結果、第一因子を変数とするモデルが予測されたので、そのモデルを採用した。したがって、変数減少法による回帰式は、

$$\text{PIL 得点} = 90.29546 (0.0001) + 5.06536 (0.05) \times \text{第一因子}$$

となった。決定係数は、0.0703、重相関係数は、0.2651であった。

(4) 「年下きょうだい」サポート

回転後の因子行列を Table 6 に示す。年下きょうだいとの精神的・心理的な支援関係という意味で「心理的サポート」、第二因子は、年下きよ

Table 6 「年下きょうだい」サポートの因子行列 (バリマックス回転)

	第一因子	第二因子	第三因子	共通性
Q4 プライベートなことについて話し合う	0.772	0.350	0.307	0.814
Q6 個人的な悩みについて話し合える	0.725	0.390	0.290	0.763
Q5 お互いの気持ちや感情を分かり合える	0.709	0.382	0.249	0.711
Q8 困ったときに助言してもらったり相手が困っているときには助言してあげたりする	0.475	0.665	0.120	0.682
Q9 分からないことを聞いたり、教えたりしあう	0.340	0.663	0.292	0.640
Q7 いろいろな情報をやりとりする	0.408	0.654	0.327	0.702
Q10 忙しいときに手伝ってもらったり相手が忙しいときには手伝ってあげたりする	0.158	0.560	0.365	0.472
Q11 必要なときに、お金や物の貸し借りをする	0.106	0.307	0.634	0.507
Q12 プレゼントをあげたり、もらったりしあう	0.175	0.224	0.607	0.448
Q2 一緒に遊びに出かけたりする	0.399	0.096	0.580	0.506
Q1 おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす	0.474	0.220	0.558	0.584
Q3 共通の趣味や関心を持っている	0.317	0.375	0.388	0.392
寄与度	2.685	2.387	2.149	7.221
寄与率 (%)	22.38	19.89	17.91	60.17

うだいとの問題解決のための情報提供という意味で「情報サポート」、第三因子は、年下きょうだいとの物的交流、娯楽活動や趣味を共有する意味で「友好サポート」と名付けた。

因子得点に基づき、重回帰分析を行ったところ、有意差が認められなかった ($F=2.42$, $df=3/139$, $p>.05$)。

(5) 「同性親友」サポート

回転後の因子行列を Table 7 に示す。第一因子を、同性親友との精神的・心理的な支援関係の意味で「心理的支持」、第二因子は、同性親友と娯楽活動や趣味を共有する意味で「友好サポート」、第三因子は、同

Table 7 「同性友人・親友」サポートの因子行列 (バリマックス回転)

	第一因子	第二因子	第三因子	共通性
Q 6 個人的な悩みについて話し合える	0.850	0.127	0.159	0.763
Q 4 プライベートなことについて話し合う	0.814	0.321	0.105	0.776
Q 8 困ったときに助言してもらったり相手が困っているときには助言してあげたりする	0.673	0.269	0.330	0.633
Q 5 お互いの気持ちや感情を分かり合える	0.663	0.272	0.313	0.612
Q 2 一緒に遊びに出かけたりする	0.198	0.589	0.255	0.451
Q 1 おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす	0.216	0.586	0.133	0.408
Q 3 共通の趣味や関心を持っている	0.125	0.582	0.249	0.417
Q 7 いろいろな情報をやりとりする	0.265	0.567	0.228	0.443
Q10 忙しいときに手伝ってもらったり相手が忙しいときには手伝ってあげたりする	0.148	0.212	0.650	0.489
Q12 プレゼントをあげたり、もらったりしあう	0.317	0.150	0.550	0.426
Q 9 分からないことを聞いたり、教えたりしあう	0.314	0.369	0.505	0.490
Q11 必要なときに、お金や物の貸し借りをする	0.067	0.308	0.453	0.304
寄与度	2.674	1.914	1.625	6.212
寄与率 (%)	22.28	15.95	13.54	51.77

性親友との物的な援助関係や問題解決のための情報提供という意味で「実体的サポート」と名付けた。

因子得点に基づき、重回帰分析を行ったところ、有意差が認められた ($F=3.16$, $df=3/24$, $p<.05$)。偏回帰係数の t 検定では第一因子 (心理的支持) のみが有意であった ($t=6.46$, $df=1$, $p<.05$)。そこで、変数減少法による変数選択の結果、第一因子のみを変数とするモデルが予測されたので、そのモデルを採用した。したがって、変数減少法による回帰式は、

$PIL \text{ 得点} = 90.83871 (0.0001) + 3.10682 (0.05) \times \text{第一因子}$
 となった。決定係数は、0.0256、重相関係数は、0.16 であった。

Table 8 「同性友人」サポートの因子行列 (バリマックス回転)

	第一因子	第二因子	第三因子	共通性
Q 6 個人的な悩みについて話し合える	0.800	0.194	0.179	0.709
Q 4 プライベートなことについて話し合う	0.721	0.198	0.272	0.633
Q 5 お互いの気持ちや感情を分かり合える	0.717	0.182	0.303	0.639
Q 8 困ったときに助言してもらったり相手が困っているときには助言してあげたりする	0.689	0.479	0.151	0.727
Q12 プレゼントをあげたり、もらったりしあう	0.380	0.317	0.269	0.317
Q 9 分からないことを聞いたり、教えたりしあう	0.403	0.702	0.224	0.705
Q10 忙しいときに手伝ってもらったり相手が忙しいときには手伝ってあげたりする	0.192	0.651	0.270	0.534
Q 7 いろいろな情報をやりとりする	0.400	0.459	0.305	0.464
Q11 必要なときに、お金や物の貸し借りをする	0.100	0.444	0.388	0.358
Q 2 一緒に遊びに出かけたりする	0.242	0.188	0.673	0.546
Q 1 おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす	0.212	0.228	0.623	0.485
Q 3 共通の趣味や関心を持っている	0.254	0.330	0.498	0.422
寄与度	2.830	1.961	1.748	6.539
寄与率 (%)	23.58	16.34	14.57	54.49

(6) 「同性友人」サポート

回転後の因子行列を Table 8 に示す。第一因子を、同性友人との精神的・心理的な支援関係という意味で「心理的支持」、第二因子は、同性友人との物的な援助関係や問題解決のための情報提供という意味で「実体的サポート」、第三因子は、同性友人と娯楽活動や趣味を共有する意味で「友好サポート」と名付けた。

因子得点に基づき、重回帰分析を行ったところ、有意差が認められた ($F=3.49$, $df=3/245$, $p<.05$)。偏回帰係数の t 検定では第一因子（心理的支持）においてのみ有意であった ($t=9.78$, $df=1$, $p<.005$)。そこで、変数減少法による変数選択の結果、第一因子のみを変数とする

Table 9 「異性友人・恋人」サポートの因子行列（バリマックス回転）

	第一因子	第二因子	共通性
Q6 個人的な悩みについて話し合える	0.813	0.218	0.709
Q4 プライベートなことについて話し合う	0.781	0.272	0.684
Q8 困ったときに助言してもらったり相手が困っているときには助言してあげたりする	0.758	0.336	0.688
Q9 分からないことを聞いたり、教えたりしあう	0.750	0.399	0.721
Q5 お互いの気持ちや感情を分かり合える	0.732	0.376	0.676
Q7 いろいろな情報をやりとりする	0.585	0.476	0.569
Q12 プレゼントをあげたり、もらったりしあう	0.295	0.762	0.667
Q2 一緒に遊びに出かけたりする	0.289	0.695	0.567
Q11 必要なときに、お金や物の貸し借りをする	0.155	0.678	0.484
Q10 忙しいときに手伝ってもらったり相手が忙しいときには手伝ってあげたりする	0.413	0.616	0.550
Q1 おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす	0.441	0.535	0.481
Q3 共通の趣味や関心を持っている	0.384	0.499	0.396
寄与度	3.992	3.200	7.192
寄与率 (%)	33.27	26.66	59.93

モデルが予測されたので、そのモデルを採用した。したがって、変数減少法による回帰式は、

$$\text{PIL 得点} = 90.93173 (0.0001) + 3.89364 (0.05) \times \text{第一因子}$$

となった。決定係数は、0.0381、重相関係数は、0.1951であった。

(7) 「異性親友 (恋人)」 サポート

回転後の因子行列を Table 9 に示す。ここでも、2 因子抽出とした。第一因子を異性親友 (恋人) との精神的・心理的な支援関係、問題解決のための情報提供という意味で「心理・情報サポート」、第二因子を、異性親友 (恋人) との物的な援助関係、娯楽活動や趣味を共有するという意味で「物理・友好サポート」と名付けた。

因子得点に基づき、重回帰分析を行ったところ、有意差が認められた ($F=3.80$, $df=2/197$, $p<.05$)。偏回帰係数の t 検定では第二因子 (物理・友好サポート) においてのみ有意差が認められた ($t=5.69$, $df=1$, $p<.05$)。そこで、変数減少法による変数選択の結果、第一因子を変数とするモデルが予測されたので、そのモデルを採用した。したがって、変数減少法による回帰式は、

$$\text{PIL 得点} = 92.77499 (0.0001) + 3.36097 (0.05) \times \text{第二因子}$$

となった。決定係数は、0.0279、重相関係数は、0.167であった。

(8) 「異性友人」 サポート

回転後の因子行列を Table 10 に示す。第一因子を異性親友との精神的・心理的な支援関係という意味で「心理的支持」、第二因子を、異性親友との問題解決のための情報交換という意味で「情報サポート」第三因子を、異性親友との物的な援助関係という意味の「物理的支持」と名付けた。

因子得点に基づき、重回帰分析を行ったところ、有意差が認められなかった ($F=1.06$, $df=3/191$, $p>.05$)。

Table 10 「異性友人」サポートの因子行列（バリマックス回転）

	第一因子	第二因子	第三因子	共通性
Q 6 個人的な悩みについて話し合える	0.819	0.282	0.211	0.795
Q 4 プライベートなことについて話し合う	0.765	0.318	0.199	0.726
Q 5 お互いの気持ちや感情を分かり合える	0.679	0.314	0.295	0.647
Q 3 共通の趣味や関心を持っている	0.383	0.350	0.309	0.365
Q 9 分からないことを聞いたり、教えたりしあう	0.403	0.685	0.323	0.737
Q 8 困ったときに助言してもらったり相手が困っているときには助言してあげたりする	0.552	0.641	0.203	0.756
Q 7 いろいろな情報をやりとりする	0.452	0.565	0.318	0.625
Q 10 忙しいときに手伝ってもらったり相手が忙しいときには手伝ってあげたりする	0.224	0.479	0.479	0.509
Q 1 おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす	0.256	0.438	0.350	0.380
Q 11 必要なときに、お金や物の貸し借りをする	0.069	0.179	0.635	0.440
Q 12 プレゼントをあげたり、もらったりしあう	0.311	0.137	0.570	0.440
Q 2 一緒に遊びに出かけたりする	0.200	0.239	0.519	0.367
寄与度	2.793	2.131	1.863	6.786
寄与率 (%)	23.27	17.76	15.53	56.55

(9) 「先生」サポート

回転後の因子行列を Table 11 に示す。第一因子を先生との問題解決のための情報交換という意味で「情報サポート」、第二因子を、先生との精神的・心理的な支援関係という意味で「心理的サポート」、第三因子を先生との物的な支援関係という意味で、「物理的サポート」と名付けた。

因子得点に基づき、重回帰分析を行ったところ、有意差が認められなかった ($F=2.61$, $df=3/186$, $p>.05$)。

(10) 「その他」サポート

回転後の因子行列を Table 12 に示す。ここでも、2 因子抽出とした。

Table 11 「先生」サポートの因子行列 (バリマックス回転)

	第一因子	第二因子	第三因子	共通性
Q9 分からないことを聞いたり, 教えたりしあう	0.727	0.280	0.163	0.633
Q8 困ったときに助言してもらったり相手が困っているときには助言してあげたりする	0.704	0.395	0.124	0.667
Q7 いろいろな情報をやりとりする	0.684	0.268	0.287	0.622
Q10 忙しいときに手伝ってもらったり相手が忙しいときには手伝ってあげたりする	0.544	0.224	0.464	0.561
Q3 共通の趣味や関心を持っている	0.328	0.278	0.299	0.274
Q6 個人的な悩みについて話し合える	0.356	0.757	0.146	0.721
Q4 プライベートなことについて話し合う	0.329	0.743	0.264	0.730
Q5 お互いの気持ちや感情を分かり合える	0.300	0.651	0.313	0.611
Q1 おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす	0.320	0.411	0.401	0.432
Q12 プレゼントをあげたり, もらったりしあう	0.139	0.283	0.645	0.515
Q11 必要なときに, お金や物の貸し借りをする	0.137	0.038	0.605	0.386
Q2 一緒に遊びに出かけたりする	0.187	0.254	0.573	0.428
寄与度	2.396	2.296	1.889	6.581
寄与率 (%)	19.97	19.13	15.74	54.84

第一因子は, その他のサポート源との精神的・心理的な支援関係という意味で「心理的サポート」, 第二因子を, その他のサポート源との物的な援助関係という意味で「物理的サポート」と名付けた。

因子得点に基づき, 重回帰分析を行ったところ, 有意差が認められなかった ($F=0.12$, $df=2/176$, $p>.05$)。

考 察

(I) サポート得点の検討から

各サポート源ごとにソーシャル・サポート得点を見た結果, 家族内では「母親」サポートの得点が最も高く, 「父親」サポートが最も低かった。ま

Table 12 「その他」サポートの因子行列（バリマックス回転）

	第一因子	第二因子	共通性
Q 8 困ったときに助言してもらったり相手が困っているときには助言してあげたりする	0.843	0.361	0.841
Q 4 プライベートなことについて話し合う	0.831	0.314	0.790
Q 7 いろいろな情報をやりとりする	0.819	0.274	0.746
Q 6 個人的な悩みについて話し合える	0.801	0.296	0.730
Q 9 分からないことを聞いたり，教えたりしあう	0.791	0.333	0.737
Q 5 お互いの気持ちや感情を分かり合える	0.748	0.346	0.680
Q 3 共通の趣味や関心を持っている	0.713	0.151	0.531
Q 1 おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす	0.706	0.411	0.668
Q 2 一緒に遊びに出かけたりする	0.645	0.354	0.541
Q12 プレゼントをあげたり，もらったりしあう	0.220	0.706	0.547
Q11 必要なときに，お金や物の貸し借りをする	0.212	0.679	0.506
Q10 忙しいときに手伝ってもらったり相手が忙しいときには手伝ってあげたりする	0.369	0.620	0.521
寄与度	5.552	2.285	7.837
寄与率 (%)	46.26	19.04	65.30

た，サポート源全体から見ると，「同性親友」サポートが最も高く，次いで，「同性友人」・「異性親友」サポートが高く，「先生」サポートが最も低かった。このことから，家族から受けるサポートよりも，友人から受けるサポートの方が，多いという，先行研究（嶋，1991）とほぼ一致する結果が得られた。ソーシャル・サポートを全般的に定義するならば，家族から受けるサポートの量の方が大きなものであると考えるが，本研究で調査したソーシャル・サポートは，個人によって主観的に認識された「知覚されたソーシャル・サポート」であるので，被調査者となった大学生にとっては，友人と持つ関係の方がよく知覚されていると考えられる。すなわち，大学生が知覚する物理的・心理的両面からの対人関係においては，家族よりも友

人の方が重要な意味をもつ存在なのではないかと考えられる。

ソーシャル・サポート得点の男女差を各サポート源別に見ると、いずれのサポート得点も女子のほうが高得点となっていた。高得点を示した主要なサポート源である「母親」サポート、「同性親友」サポートと「同性友人サポート」では、その差がはっきりと表れていた。このような傾向は欧米の研究でも見いだされている (Leavy, 1983)。日本でも、知覚されたサポートの場合には、家族と友人の2種類のサポート得点は、女子のほうが男子よりも高いという結果が報告されており (和田, 1992; 上田・橋本, 1993; 福岡・橋本, 1995)、本研究の結果も先行研究の知見と対応したものであった。しかし、「異性親友 (恋人)」, 「異性友人」サポートにおいて、性差による違いは、先行研究 (嶋, 1992; 豊松・小村・高木, 1998) の結果ほどは見られなかった。異性の友人に対するサポートの認識の違いには、性差よりも個人差による影響が強く働いたために、このような結果となったと考える。

(II) 実存的意識と GHQ との関係から

本研究は、大学生が自分の人生に目標や意味を見だし、人生を積極的に生きていこうとする姿勢での実存的視点の違いが、日常生活における精神的健康にどのように影響しているのかということをもつて PIL テストと GHQ を指標として用いて検討したものである。PIL テストによって測定された実存的意識の得点が、低いほど、GHQ によって測定された精神健康度の得点高くなり、逆に実存的意識の得点が高いほど、精神健康度の得点は低くなるという負の相関関係が見られた。このことから、人生における満足度や目的、自己の存在価値、生きる上での意味を見いだして、それを意識したり日常の生活態度において示している大学生ほど、精神的に健康であり、逆にそうでない大学生は精神的に健康ではなくなるのではないかと考える。そして、GHQ の下位 4 尺度の一つである社会的活動障害において、最も大きい負の相関関係があった。この社会的活動障害に関する GHQ の質問項目

の内容は、例えば、「いつもより日常生活を楽しく送れたかどうか」や「いつもより自分のしていることに生き甲斐を感じる事ができたかどうか」などを問うものである。つまり内容的に見て、他の GHQ の下位尺度よりも実存的意識と直接的に関わっている尺度であったため、比較的強い相関関係が見られたのではないかと考える。

(Ⅲ) 実存的意識とサポート得点の関係から

PIL テストによって測定された個々の実存的意識を得点群ごとに分類したサポート得点をサポート源別に検討したところ、「その他」のサポート源を除くどのサポート源においても、実存的意識が低い群ほど、サポートに対する認識は低くなり、高い群ほどサポートに対する認識は高くなる傾向が示されている。しかし、単純に実存的意識の認識のレベルがサポートの量に関係しているとは説明できない。また、どのサポート源に対しても実存的視点での認識が同じであるとは考えられない。つまり、サポート源によって知覚されたソーシャル・サポートが、実存的意識に対して有効に働いているかどうかの違いが見られるはずである。そこで、さらに詳細な検討を行って知覚されたソーシャル・サポートの潜在的構造と実存的意識との関係を考えていった。

(Ⅳ) 知覚されたソーシャル・サポートの内容が実存的意識に及ぼす影響から

知覚されたサポートの評定項目から因子分析によりサポートの潜在的構造を見いだした。そして、各サポート源別に抽出された因子構造が、実存的意識に与える影響について考え、各サポート源について以下に述べていく。

(1) 「父親」サポート

分析の結果得られた回帰式から、父親から得られるサポートに関して、

父親との「実体的サポート」関係は、PIL得点の増加をもたらす効果、すなわち実存的意識を増進させる効果があることが考えられる。つまり、大学生は実存的意識を増進させるための一つの有効的な手段として、父親からの金銭的・物質的な資源や援助、問題解決のためのアドバイスや指導といった情報提供、というようなサポートを利用していると考えられる。「父親サポート」は、サポート得点の検討において、得られるサポート量は少なく大学生を取り巻く人間関係の中では、その影響力は低いものだと考えていた。しかし、知覚されたサポートの内容と実存的意識の分析結果からの父親との「実体的サポート」関係より考えると、大学生にとって父親とは、サポートを必要としないときは交流も少なく関係性は低いものではあるが、自分の力では問題に対処できなくなった場合に、心理的なサポートよりも問題解決のために情報や資源（金銭や道具）を提供するという「量」ではなく「質」の役割をもつ。父親からの「実体的サポート」が大学生の実存的意識の増進に影響しているのではないかと考えられる。

(2) 「母親」サポート

分析の結果得られた回帰式から、母親から得られるサポートに関して、母親との「心理サポート」関係と「友好サポート」関係の二つが実存的意識を増進させる効果があることが考えられる。大学生は実存的意識を増進させるための一つの有効的な手段として、母親との心理的・精神的な結びつきの強さ、すなわち母子関係的なサポートと母親との日頃の何気ないやりとり、娯楽活動や趣味を共有するという友好的関係によるサポートの両方を利用していると考えられる。母親のサポートと父親のサポートの因子構造には、ほとんど違いは見られない。しかし、知覚されたサポートの内容と実存的意識との分析結果において、父親と母親で明確な違いが見られたことから考えれば、大学生にとっての母親とは、父親が問題解決のための情報や資源を提供するという役割をもつものに対して、自

分の力で問題を解決できるように心理的に支える役割と親密な関係における日頃の何気ないやりとりから生まれる友好的な役割をもっており、父親とは異なった役割をもつ。母親からの「心理的サポート」と「友好サポート」が大学生の実存的意識の増進に影響しているのではないかと考えられる。

(3) 「年上きょうだい」サポート

分析の結果得られた回帰式から、年上きょうだいから得られるサポートに関して、年上きょうだいとの「心理的サポート」関係は、実存的意識を増進させる効果があることが考えられる。つまり、大学生は実存的意識を増進させるための一つの有効的な手段として、年上きょうだいへの悩み事の相談、年上きょうだいとの相互理解、問題解決のための情報提供といった心理的交流のサポートを利用していると考えられる。知覚されたサポートの内容と実存的意識の分析結果からの年上きょうだいとの「心理的サポート」関係より考えると、大学生にとって年上きょうだいは、アドバイス、趣味や価値観の共有といった心理的作用に及ぼす役割をもつ。年上きょうだいからの「心理的サポート」が大学生の実存的意識の増進に影響しているのではないかと考えられる。

(4) 「同性親友」と「同性友人」サポート

分析の結果得られた回帰式から、同性親友と同性友人から得られるサポートに関して、同性親友と同性友人とも「心理的サポート」関係が、実存的意識を増進させる効果があることが考えられる。つまり、大学生は実存的意識を増進させるための一つの有効的な手段として、同性の友人への悩み事の相談、同性の友人との相互理解といった心理的交流のサポートを利用していると考えられる。「同性親友サポート」は、サポート得点の検討において得られるサポート量は大学生を取り巻く人間関係の中では、最も多く、「同性友人サポート」もそれに次ぐものであったこと

から大学生にとって重要な役割をもつ存在である。知覚されたサポートの内容と実存的意識の分析結果から同性の友人との「心理的サポート」関係より考えると、大学生にとって同性の友人とは、同じ立場での仲間意識、価値観の共有といった内面的な活動における相補的な役割をもつ。同性の友人からの心理的サポートが大学生の実存的意識の増進に影響しているのではないかと考えられる。

(5) 「異性親友 (恋人)」サポート

分析の結果得られた回帰式から、異性親友 (恋人) から得られるサポートに関して、異性親友 (恋人) との「物理・友好サポート」関係が、実存的意識を増進させる効果があることが考えられる。つまり、大学生は実存的意識を増進させるための一つの有効的な手段として、異性親友 (恋人) との行動的交流、共通の趣味、物的な援助といった実体的なサポートを利用していると考えられる。「異性親友 (恋人) サポート」は、サポート得点の検討において得られるサポート量は大学生を取り巻く人間関係の中では多かったことから大学生にとって重要な役割をもつ存在である。知覚されたサポートの内容と実存的意識の分析結果から異性親友 (恋人) との「物理・友好サポート」関係より考えると、大学生にとって異性親友 (恋人) とは、デート (ドライブ・食事・ショッピング)、プレゼントの交換などの外面的な活動における相補的な役割をもつ。異性親友 (恋人) からの「物理・友好」サポートが大学生の実存的意識の増進に影響しているのではないかと考えられる。

また、このような関係は、「異性親友 (恋人)」サポートのみに見られ、「異性友人」サポートでは見られなかった。このことからサポート源が異性の友人の場合は、特定の一人のみが大学生の実存的意識の増進に重要であると考えられる。

(6)それ以外のサポート

分析の結果、「年下きょうだい」、「異性友人」、「先生」、「その他」のサポート源のソーシャル・サポートの構造因子から、実存的意識の変化を説明する要因は見られなかった。

(V) 総合考察

本研究における社会的ネットワーク分析より得られた対人関係の構造から、家庭関係からは、「父親」・「母親」・「年上のきょうだい」、友人関係からは、「同性親友」・「同性友人」・「異性親友（恋人）」からのソーシャル・サポートが、個々の実存的意識に影響を及ぼし、他者からのソーシャル・サポートを認識することが、実存的意識の増進に効果をもつことが示された。さらに、このような実存的視点でのサポートの認識は、どの対人関係においても同一のものではなく、父親・母親・年上のきょうだい・同性親友・同性友人・異性親友（恋人）にそれぞれ存在するサポートの内容の中から、どのサポートが有効であるかを選択的に知覚し、実存的意識の増進にそのサポートを利用していると考えられる。

また、本研究では、個々の内的特性である実存的意識が、自覚される精神的健康に直接的に関係していることが考えられる。

つまり、実存性が高いほどサポートの認識が強く、サポート因子の中の特定の因子が実存性を高める効果があるという本研究の結果から、渡辺・関・斉藤（1997）が提唱したモデルと類似したモデルが得られた（Fig. 7）。本研究の目的である個々の内的特性である実存的意識を媒介とする知覚されたソーシャル・サポートと精神的健康の因果影響関係を検討した結果、個人を取り巻く対人関係から知覚されたソーシャルサポートが、直接的に実存的意識の認識へ、また間接的に精神的健康に影響力を及ぼしている状況が示されたのではないかと考えられる。すなわち、実存的な行動パターンであるほど社会環境との関わりが促進され、その関係がさらに実存性を維持・促進していく働きをもつということがいえる。

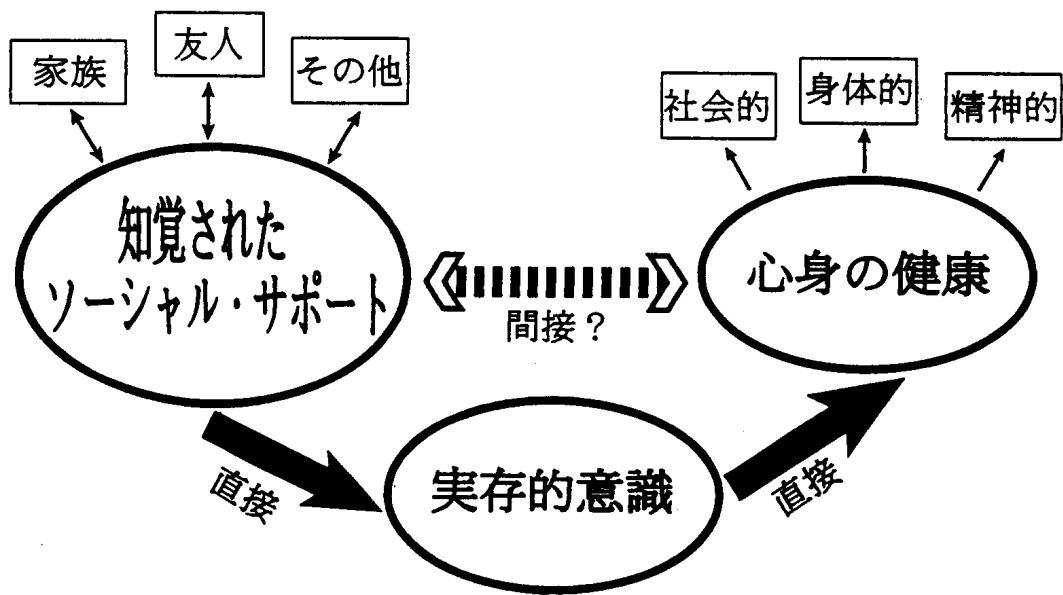


Fig. 7 実存意識を媒介とする知覚されたソーシャル・サポートと精神健康度の因果影響関係を表す仮説モデル

ストレスは瞬時にあるもので、なかなか回避しがたいものである。そのストレスに如何に対処するかは、自己管理行動としての知覚されたソーシャル・サポートの正確さが重要となる。その正確さのための訓練法がはっきりしていないのが実状ではあるが、本研究はその正確さの増大のための一歩であったと考えるものである。

要 約

個々の内的特性の一つである充足感、満足感、達成感といった実存性も、ソーシャル・サポートの媒介要因の一つとして個人の精神的健康に作用する。このような考えに基づいて、本研究では、知覚されたソーシャル・サポートと精神的健康の因果影響関係について、実存的意識を媒介要因として検討することを目的とした。そして、個人を取り巻く対人関係の構造の分析、それから知覚されたソーシャル・サポートと実存的意識の分析をより詳細に行うために行った多変量解析の結果から、実存的視点でのサポートの認識は、どの対人関係においても同一のものではなく、サポートが知覚される対人関係にそれぞれ存在する固有のサポート内容の中から、有効

なサポートを選択的に知覚し、実存的意識の増進にそのサポートを利用していると考えた。また、内的特性である実存的意識が、自覚される精神的健康に直接的に関係していることが検討された。つまり、個人を取り巻く対人関係から知覚されたソーシャル・サポートが、直接的に実存的意識の認識へ、また間接的に精神的健康に影響力を及ぼしている状況が示されたのではないかと考えられる。

References

- Barrera, M., Jr. 1986 Distinction between social support concepts, measures, and models. *Amerikan Journal of Community Psychology*, 14, 413-445
- Caplan, G. 1974 Support system and community mental health. New York : Behavioral publications. (近藤喬一・増野 肇・宮田洋三訳：地域ぐるみの精神衛生, 1979, 星和書店)
- Cassel, J. 1974 Psychological process & 'stress': Theoretical formulations. *International Journal of Health Service*, 4, 471-482
- Cobb, S. 1976 Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314
- Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Stress, social support and the buffering hypothesis *Psychological Bulletin*, 98, 310-357
- Crumbough, J. C., & Maholick, L. T. 1964 An experimental study existentialism: The psychometric approach to Frankl's noogenic neurosis. *Journal of Clinical Psychology*, 20, 200-207
- Crumbough, J. C., & Maholick, L. T. 1969 Manual of instructions —for the purpose in life test. Psychometric Affiliates
- Frankl, V. E. 1969 The will to meaning : Foundations and applications of logotherapy. New York: The New American Library. (大沢 博訳 1979 意味への意志 ぶれーんぶっくす)
- 福岡欣治・橋本 宰 1995 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の研究 教育心理学研究, 43, 185-193
- Goldberg, D. P., & Hiller, V. F. 1979 A scaled version of the general health questionnaire *Psychological Medicine*, 9, 139-145
- Gottlieb, B. H. 1981 Social networks and social support in community mental health. In B. H. Gottlieb (Ed.) *Social networks and social support*. Beverly Hills:

- Sage, PP. 11-42
- Gottlieb, B. H. 1985 Social support and the study of personal relationships *Journal of Social and Personal Relationships*, 2, 351-375
- 久田 満 1987 ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題 看護研究, 20, 170-179
- 堀野・森 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, 39, 308-315
- Iwata, N., & Saito, K. 1987 Relationships of the Todai health index to the general health questionnaire and the center for epidemiologic studies depression scale. 日本衛生学雑誌, 42, 865-873
- Leavy, R. 1983 Social support and psychological disorder: A Review. *Journal of Community Psychology*, 11, 3-21
- 南 隆男・稲葉昭英・浦 光博 1987 「ソーシャル・サポート」研究の活性化に向けて——若干の資料—— 哲学, 慶応義塾大学三田哲学会, 85, 151-184
- Norbeck, J. S. 1985 International nursing research in social support: Background concepts and methodological issues. First inter national nursing reserch conference on social support: Proceedings June 13-14, 羽山由美子訳 1987 ソーシャル・サポートに関する看護の国際的研究の動向——基本概念と方法論上の問題点について—— 看護研究, 20, 181-191
- Rook, K. S. 1987 Social support versus companionship: Effects on life stress, loneliness and evaluation by others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1132-1147
- 斎藤むら子 1998 職場環境における人間行動——受動的行動から能動的行為へ—— 人間工学, 34, 6, 287-295
- 佐藤文子 1975 実存心理検査——PIL——, 岡堂哲夫編「心理検査学」, 323-343, 垣内出版
- Sato, F., & Tanaka, H. 1974 An experimental study on the existential aspect of life: Part 1——the crosscultural approach to purpose in life——. *Tohoku Psychologica Folia*, 33, 20-46
- 佐藤文子・山口 浩・田中弘子・斎藤俊一・岡堂哲夫・千葉征慶 1990 PIL (実存心理検査) 日本版に関する基礎研究 2 - 1 : Part-A の項目分析—— 日本心理学会第54回大会発表論文集, 125
- Schaefer, C., Coyne, J. C., & Lazarus, R. S. 1981 The healthrelated function of social support. *Journal of behavior medicine*, 4, 381-406
- 嶋 信宏 1991 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, 39, 440-447

小林・小村・高木：知覚されたソーシャル・サポートの分析的研究

- 嶋 信宏 1992 大学生におけるソーシャル・サポートの日常ストレスに対する効果
社会心理学研究, 7, 45-53
- 鈴木庄亮・柳井晴夫・青木繁信 1976 新質問紙健康調査票 THI の紹介 医学の歩
み, 99(4), 217-225
- Swann, W. B. Jr., & Predmore, S. C. 1985 Intimates as agents of social support: Source
of consolation or despire?. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1609-
1617
- 豊松展史・小村緩岳・高木敬雄 1998 知覚されたソーシャル・サポート 広島修道
大学論集, 38, 2, 295-336
- 上田順子・橋本 宰 1993 大学生のソーシャル・サポートの性差に関する研究 同
志社心理, 40, 38-42
- 浦 光博・南 隆男・稲葉昭英 1989 ソーシャル・サポート研究——研究の新しい
流れと将来の展望—— 社会心理学, 4, 78-90
- 和田 実 1992 大学新生の心理的要因に及ぼすソーシャル・サポートの影響 教
育心理学研究, 40, 386-393
- 渡辺秀人・関 宏幸・斎藤むら子 1997 職場環境と主体的行動に関する研究——自
己効力感と感情状態を介して—— 人間工学, 33, 278-279
- 山口 浩・佐藤文子 1993 PILテスト(実存心理検査)にみられる大学生の生きが
い感 岩手大学・保健管理センター紀要, 19, 5-16

Summary

An Analytical Study of Perceived Social Support

Shigeki Kobayashi, Yasutaka Omura
and Takao Takagi

This study examined the influence of perceived social support on mental health, through the concept of purpose in life which leads to the existential aspect. University students (N=250) completed a social support questionnaire, GHQ and PIL as measures of mental health and purpose in life. Correlation analysis between scores of GHQ and PIL showed positive results. As the existential aspect was stronger, mental health also improved. Factor analyses were conducted on responses to 12 social support scales by 10 support sources, and produced 2 or 3 factors. Results of regression analysis indicated that social support factors from families and friends were related to the existential aspect. These results suggest that social support from particular persons can improve the existential aspect, and consequently it can also improve mental health.